Funeral Cry

PERCEPTRON
since 2000

Transformer
PERCEPTRON
since 2000

contents

中表紙……P3

目次……P4

Emergency（浅賀葵）……P5

例えばこんな非日常（三毛猫）……P25

FreeTalk……P29

奥付……P30

Perceptron presents

我と我が一族に敵対したこと

必ず後悔することになるぞ

ズバッ
依頼は迅速に行うのが鉄則だがな…あんたは上玉過ぎる
…あ
ギリギリッ
くく… せいぜい楽しませてもらうぜ

ほら
このまま引きあげると
どうなると思うよ？
ガリ
ガリ
ガリ
ガリ
あ…
あ…あぁ
ブル
ブル
や…
やめ…んか
ガリ
ガリ
ぐすっ
こ…この
無礼…者が
ふん！
嫌だね
ぷぷっ
ひぃっ!!!
とろぉお…
ビリ
ビリ
ビリッ
ビリッ

ビクッ
やあぁっ
ビクッ
プシャ
じょろろろ
プル
あ…あっ
プル
ア
ア
ア
ア
びちゃっ
びちゃ
はっ
はっはっ
はっはっはっ!!!!
ぱんっ
ぱん

おもらしかよ
何をビビってんだ!?
本当に
引き裂くとでも
思ったかよ
ぎり
ぎり
そんな勿体無い事
しねーよっ
ビッ
プルン
なっ
そ…それは!?
ぐちゅ
ローターだよ
ちょっとばかし
強力だけどな
ビリビリイイイイ

いやぁっ
ぐぐぐ〜〜
ピク
ピク
おぁぁぁぁ
ぎち
ぎち
ぎち
あぁっ
ほら あと少しで
咥えちまうぞ
…んぐぅ
…んあっ
あぁぁぁぁっ
あぁっ

あぁ…

ハァ

あ…

くく…凄いじゃん
奥まで入っちゃったよ

ギリィッ

こ…この
痴れ者がっ

…殺して
やるっ

ははは
無理無理

グッ

これから少なくとも
その殺意が萎える位
狂ってもらうからね

チキ
チキ
チキ
MAX

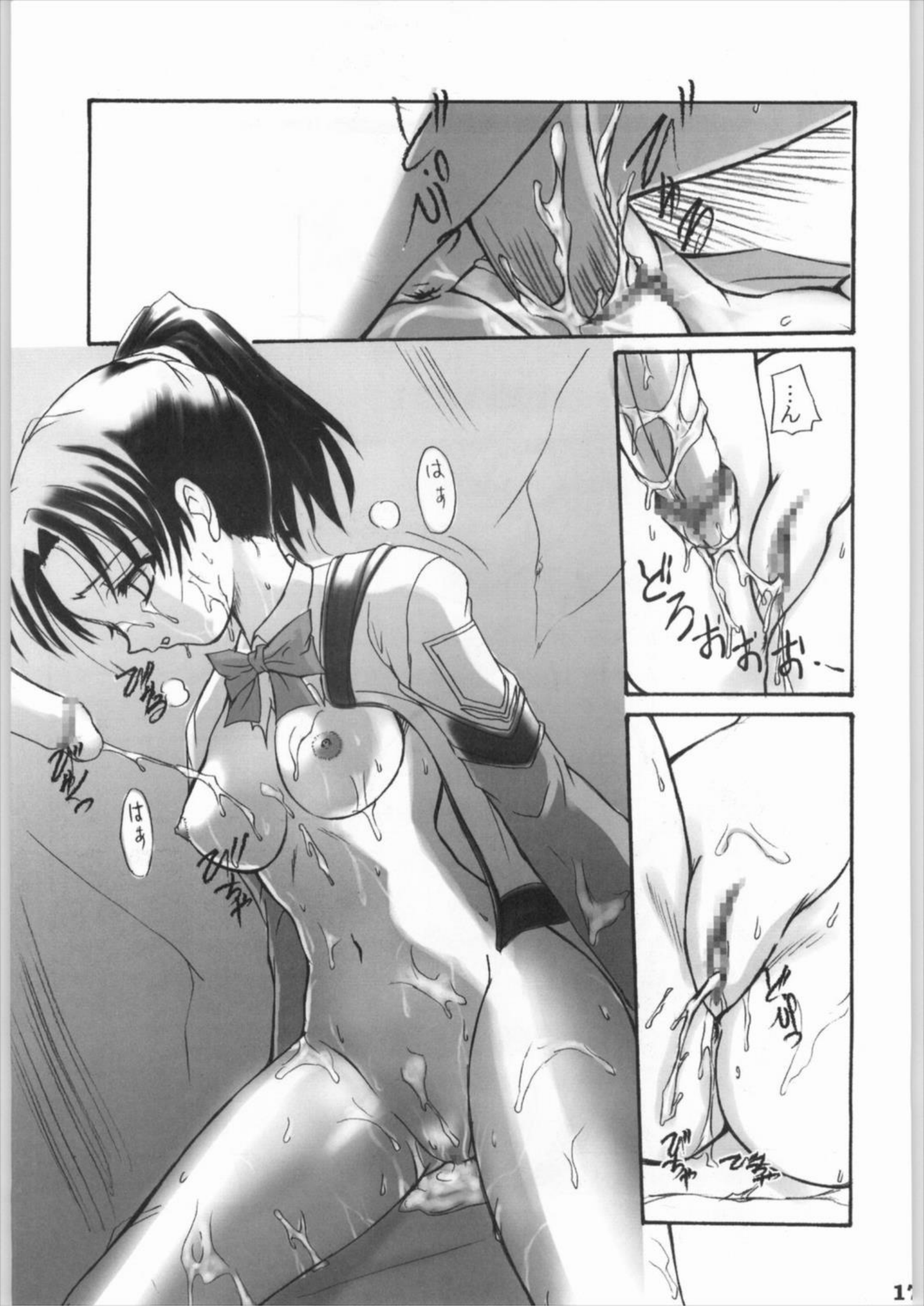
ああぁ
ヴヴヴヴヴヴ
一秒間に100回近く振動する特別製だ凄いだろう？
ヴヴヴヴ
っあ
すご…凄ひいっ…
すぐに 正気じゃいられなくなる
ぅあぁぁ
ビクッ
いやぁ
駄目ッ……と…とめてぇっ
ビクッ
ん…っんああ
ぼっ
ビィィィン
はっ…ひぃ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ああっ!!!!

くく
残念
抜けちまったか
でも 直ぐに
代わりのものを
ぶち込んでやるよ
コッ
あん
ひぃ
もにゅ
もにゅ
ふん
どうした？胸を
揉んでるだけだぜ？
またイきそうなのか？
はひぃっ
そんじゃ折角だ
思う存分
イかせてもらえ

…あっ
ちゅぱっ
ぴちゃ
ぺちゃ
ぐぷっ
ビクビクッ
や…ん
ぴちゃ
ぴちゃ
んふっ
んはぁ
ビクン
クリ
クリ
ぱぷゅ
あ
やぁぁ…っ

や…んふっ
て 手を離せ
ああぁ
いっ…
やぁあああ
ああぁぁ
ぁぁっ

さすがに…きついっ
んあっ…ンふ……ひっうン
…んふっ
…う…あぁあ…あっっ
んあっ！
あ…ああ…んっあ～～～～～っっ


はぁ
はぁ
…ん
どろおおお…

壁に手をついて尻を向けろ
こう…か？
そうだ 随分と素直になってきたじゃないか
くく 犯されたのがそんなに効いたか？
否！ 頭の切れる貴様のことだ
従順なフリをして逃げる機会を探っているんだろう？
そ…そんな事はない

くく…何を動揺してる？
まさか図星だったか？
ひっ
だが！
そんな事は考えるだけ無駄だ
…んはぁ
…う…あぁ入ってく…る
あ…ふっ
尻から飲む牛乳の味はどうだ？

くく…早速効いてきたかいい音してるぞ
うっ！
ぐぷ
ぎゅっ
ゴロゴロ
ぐりぐり
ポキ
う～
あぁ
ケツの穴……しっかり閉めておけよ
グチュッ
んんっ…かふっ
あああっ…うあっ
ぱんっ
ぱんっ
にゅぷっ
ぐぷっ
ぐちゅっ
ぐぷっ
ぐちゅっ
ぐちゅっ
…ぎっ

ん…んふっ
ぎゅっ
ぐにゅ
ゴロゴロゴロ
んっ…あぁっ…ふ…触れるなっ
くく こいつはイイあそこも よく締まってるぜ
ぐちゅっ
ぐちゅっ
ぐちゅ
ゴロゴロ
うはっ…んっ
ゴロゴロ
ゴロゴロ
ガクガクガク
あうっ
ほら もっと尻に力 入れろ！
ビクッ
ビクッ
ビクッ
はひぃ
おねが…も…ぅ
漏れ…る

はぁっ

はぁ

はんっ…
ん…んぶっ

…んんっ

っっ…たっぷり
注いでやるぞ

…っん
んぐぅっ

…んうっ
あ…まま
う…ぁ
だめ…
おぁ…
んひいっ！

…んはぁっ
あぁぁ
あはぁっ
…あふっ
…全ては青の為に
ああっ
もっとぉ
かけてかけてぇ
お前の死により
彼の者は
竜になるだろう

例えばこんな非日常

三毛猫

「いいか、今日はここまでだが、死にたくなければしっかりと訓練をしろよ」
そう言って本田先生は教室を出て行った。
僕は机に座って考える。
誰と一緒に作業しようかな…、
やっぱり舞かなぁ、あのポニーテールは殺人的な魅力を醸し出しているし、なにより僕はポニーテールが好きだ。
最近はとんと町で見かけなくなったよなぁ…、
残念なことだよ、本当に。
「お～い速水～」
滝川がブンブン手を振りながら寄ってくる。
「何か用？」
「一緒に訓練しないか？」
「やだっ」
「がーん」
速攻で断る。
なんで訓練まで男と一緒にやらねばならぬのか、そんな汗臭い青春などまっぴらごめんである。
それよりは、原さんや森さんと汗まみれになりながら整備をした方がよっぽどましである。
というか、明らかにそちらの方が良いな。
「速見～、どっかにトリップしてないで頼むよぉ」
情けない声で滝川が泣き付いてくる。
「なんで、そんなに必死なの？」
滝川のあまりの様子に一応聞いてみる。
「実はな、俺見ちまったんだよ」
声のトーンを落として滝川が語りだした。
「それは昨日のことだったんだ。俺が二番機パイロットの仕事を終えて帰ろうとしたら、でたんだよ」
「な、なにが？」
僕は喉をゴクリと鳴らしながら続きを促した。
「げ、幻獣。あれは小さいけど確かに幻獣だった」
その言葉に嘘は微塵も感じられなかった。
しかし幻獣だって？それが本当だとしたら一大事だ。
「本田先生にはもう言ったの？」
「いや、とりあえず見間違いだったら嫌だし、
もう一度よく調べてからの方が良いかなと思って」
「なるほど、でも一人で確かめる勇気はないから、僕に手伝っ

欲しいという訳だ。」
「な、何か言い方に刺があるんだけど、その通りです。」
「わかった。僕でよかったら協力するよ」
「あ、ありがとう速水～」
その夜僕と滝川は、滝川が幻獣を見たという場所まで歩いていた。
「それで、その小さな幻獣はどこで見たの？」
「プレハブ校舎の階段を走って登っていったんだ。そしてその途端に消えちまったんだ」
「う～んなるほど、それじゃあ小隊長室から監視をしようか」
僕達は小隊長室から外の窓から様子をうかがった。
一時間後……異常なし。
二時間後……異常なし。
「滝川～、本当に見たんだろうな」
小声で話し掛ける。
「本当だってば、信じてくれよ」
「だって、何も起こらないじゃないか」
などとそんなやり取りをしていると、急に目の前が明るくなった。
「んっ、なんだっ」
滝川が驚いて声を上げる。

「整備員詰所からだっ」
その明るい光は、しばらく光続けた後、ゆっくりと薄くなっていき、やがて消えた。
そしてまた辺りは静けさを取り戻した。
「な、なんだったんだ？」
滝川が恐る恐る聞いてくる。
膝がカクカクと笑っている、余程驚いたのだろう、まぁ、僕も心臓がバクバクいっているが。
「と、とりあえず行ってみよう」
「そ、そうだな…」
僕達はゆっくりと慎重に、整備員詰所に近づいていく。
辺りは静寂に包まれていて、息をする音でさえ大きく感じられた。
僕達は整備員詰所の壁に取り付くと、顔を見合わせて頷いた後に、ゆっくりと窓から中の様子を覗き込んだ。
「あ、あれは…」
「い、石津…」
そこには魔法使いの格好をした石津　萌がいた。
ご丁寧に床には魔方陣らしきものが書かれている。
しかもその周りを何だか得体の知れない生物が走り回っている。

僕は滝川の方を見る。
滝川は何も言わずにコクリと頷いた。
どうやら昨日滝川が見た幻獣というのは、コレに間違いがない様だった。
それにしても…。
僕はもう一度石津の方を向く。
どうしても突っ込みたいことが僕にはあった。
それは、夜中に魔法陣書いて何か呼び出すなんて、お前はどこぞの無口な先輩かぁ〜。 と言う事だった。
次の瞬間、すごい勢いで石津がこちらを向いた。
まるで、僕の思ったことを感じとったかのようだった。
僕達と石津の目が合う。
しばらくの沈黙の後、石津が口を開いた。
「み…見た…わね…」
その目は、怪しく光っていた…様に見えた。
いやっ、光っていた。
「ど、どわわあ〜」
滝川が耐え切れなくなって逃げ出した。
僕も逃げ出そうとした途端に肩を掴まれる。
「ど…こへ…行く…の」
僕の肩に手を置きながら石津が言った。
普段は鈍いくせに何でこんな時だけ動きが早いんだ〜。

「丁度…人で…が…足り…なかった…の…。て…手伝って…」
そんな突拍子もない事を言い出した。
こ、断りたい。でも断ったら断ったで何か身の危険を感じる…。
じ〜っと感情のこもっているのかわからない目で見つめられる。
「わ、わかりました。て、手伝わせて頂きます」
こ、断れなかった…。
「そう…あ…ありがと…」
僕の肩から手を離し歩いてく石津。
その背中がついて来いと言っている様だった。
僕はそれに渋々付いて行くことしか出来なかった。
「い、一体僕はどうなるんですか？」
魔方陣の中心に座らされて、僕は嫌な予感が全開だった。
「だ…だいじょう…ぶよ…。痛い…のは…さ…最初…だけ…だから…」
「ど、どういう意味ですかぁ〜？」
こ、これはあれか、世間一般で言うところの、生贄ってやつですか？
石津はそんな不安げな僕の言葉など、まるで聞こえていない様

に、なにやら呪文を唱え始めた。
それに呼応するかの様に辺りに風が渦を巻き始め、幻獣の様な小さな生き物がギャッギャッと魔方陣の周りを走り回る。
なんかもう、この世の情景ではなかった。
「いっ、一体何がやりたいんだぁ～」
「の…呪い…よ…。」
「はいっ？」
「あ…明日は…プ…プール…でしょ…。だ…だから…の…呪う…の。水着…嫌…だから…雨を…降らすの…」
淡々と小さな声で、しかし力強い口調でそう言った。
「そ、そんなことの為に僕は生贄にされなきゃいけないのかぁ～」
「だ…大丈夫…よ…。し…死には…しないわ…。
た…ただ…ちょっと……」
「ちょっとなに？中途半端に終らないでよ。気になるじゃないかぁ～」
石津はそれ以上答えようとはせずに、呪文を唱えていた。
「ちょっ、ちょっと。質問はまだ…」
あっ、何か力が抜けて行く…。
僕はこんなところで終わりなのか、こんなことなら、舞の靴下の匂いを嗅いでおけば良かった。
そんなことを考えている間に、僕の意識は遠のいていき、やがて暗転した。
気が付くと僕は、自分の部屋のベットに横たわっていた。
日付はすでに翌日になっていて、そして外は、雨が降っていた。

終わり

初めての方には初めまして。浅賀葵です。

今回は、液が当社比１３５％増しです。液描くのが楽しくて、ついつい
描き続けてしまいました。いかがだったでしょうか。

ガンパレは、非常に色んな事が出来るゲームでして、最初にプレイしたときは
舞のケツばかり追いかけてました。
テレパスセル（各キャラの居場所特定）＆テレポートセル（瞬間移動）と言う
２連コンボで、ストーカーが出来るんですよね、、（笑）

そんなわけでして、必然的に今回の本は、ガンパレのヒーローこと芝村舞さん
に。どうも、綾香等々、お嬢（姫）様系のキャラに弱いようです。
後、つり目ってのもポイント高いでｗ

今回のゲストは、三毛猫さん。
急なお願いだったにも関わらず、ありがとうございました。
萌、凄いイイ味出てます☆

この本をお手にとっていただいた方に感謝を込めて☆
少しでも皆様に楽しんでいただけたのであれば幸いです。
また、次回お会いしましょう

浅賀葵

PERCEPTRON
since 2000

EmerGency

発行 ぱーせぷとろん
発行日 ２００１年１２月２９日
印刷 ニモ印刷工房

無断複製、無断転載は禁止。
１８歳未満の方の購入も禁止です。

-Emergency-

perceptron presents
GunparadeMarch mai shibamura

FOR ADULT